

台東区浅草通りにおける緑化の研究

-街路環境の評価とその問題点との関係-

0160番 島田明美

指導 高宮真介教授

佐藤慎也助手

1.はじめに

地区環境改善、保全等をしていくための制度として、景観条例・まちづくり条例の制定が年々増加している。住民・ユーザーの参加が重視されてきた今日の地域の環境整備・まちづくりにおいては、市民・行政の協働によるところが大きい。下町としてよく知られる浅草・上野がある台東区にもこうしたまちづくり計画が進められている。私は下町という個性や雰囲気のあるまちの緑がどのように改善され守られていくのかに興味をもった。

そこで、身近な地域であり下町としてよく知られる台東区の環境・景観という点においての街路樹の実態を把握し、緑化の調査をしたい。

2.研究目的

台東区には、寛永寺や浅草寺の歴史ある寺社や文化財が多く、樹林等と一体となって個性ある都市環境を形成している。

しかし近年の建設ラッシュなどの都市開発により緑被地が次々と減少している。観光に最も力を入れている台東区がこれらの問題により、下町らしいまちなみを失いつつある。観光客の減少や高齢化の原因にもこのことが影響しているのではないだろうか。台東区では、様々なまちづくり条例を示しているがそれがまちなみに現れているとは、信じがたい状況である。

本研究では、街路において人々の受ける緑の印象調査し、さらに浅草通りの緑化の実態を把握した上で、その関係から問題点を抽出することを目的とする。また、これらの問題点から街路環境改善としての提案を行う。

3.研究の方法

本研究では、台東区が上野駅・浅草駅をシンボル拠点として結んでいる浅草通りを調査地域とする。浅草通りは全長約1.5km続く大通りであり上野～浅草間という特徴ある地域を結んでいるため、3箇所に分けて調査することにする。この分け方としては、駅周辺の通りとその間の商店が並ぶまちなみを比較しようというものである。そのことによって、浅草通りという1つの街路の構成の実態や特徴をとらえる。以下に手順を示す。

- 1) 浅草通りの3つに分けた箇所のエレベーションを80m間カラー写真撮影する。
- 2) 撮影した写真によりパネルを作成する。撮影は、反対側の歩道より行い、撮影可能な5階までとした。建物のぼらつきはあるが建物の平均として5階とした。(写真1～3に一部を示す。)
- 3) パネル化した写真を用いて被験者によるSD法を用いた調査を行う。

評価はSD法によって行い、25対の形容詞句の7段階評価尺度を定めた。

4) 被験者による評価結果を集計し図1に示す。

5) 浅草通りを調査し、その現況と計画を把握する(台東区全体に共通する箇所も含む)。そして、4)までに行った評価結果をもとに比較し考察する。

写真1.浅草通り 東上野3丁目



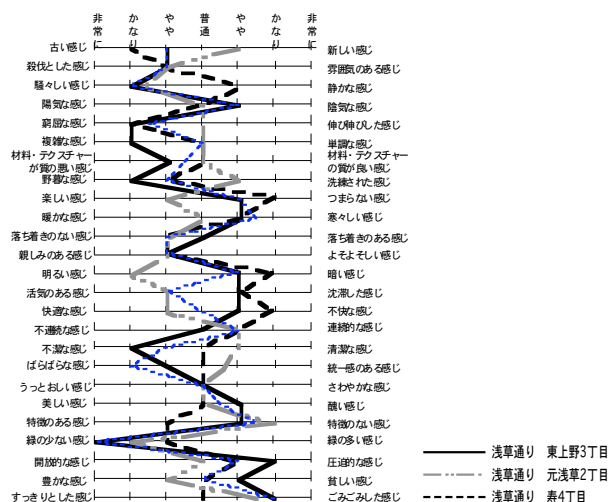
写真2.浅草通り 元浅草2丁目



写真3.浅草通り 寿4丁目



図1.7段階評価 3地区比較



4.調査結果

4-1) 被験者による評価結果から読み取れるそれぞれの地区の特性を以下にあげる。

<浅草通り 東上野3丁目>

- 非常に【緑が少ない感じ】 ○かなり【複雑な感じ】
- かなり【圧迫的な感じ】 ○かなり【不潔な感じ】
- やや【沈滞した感じ】

<浅草通り 元浅草2丁目>

- かなり【古い感じ】 ○かなり【暗い感じ】
- かなり【不快な感じ】 ○やや【静かな感じ】

<浅草通り 寿4丁目>

- かなり【緑が少ない感じ】 ○かなり【特徴がない感じ】
- やや【新しい感じ】

さらに、3地区の平均値と各地区の値がほぼ一致するものを3地区の共通する特性ととらえる。(平均値から差が1以内のもの、または一致しているもの。)

<3地区共通の特性>

- 非常に【緑が少ない感じ】 ○やや【殺伐とした感じ】
- やや【やや陰気な感じ】 ○やや【親しみのある感じ】
- やや【連続的な感じ】

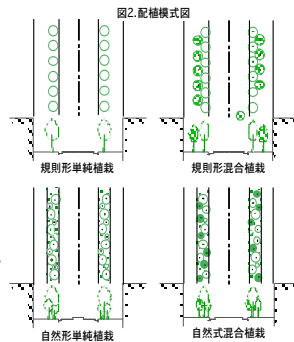
4-2) 浅草通りに関する街路の調査

a)まず、樹木の本数に関する調査の結果を表1に示す。表2から、街路-左は街路-右よりも樹木の本数が25本も多いことが分かる。さらに、区画ごとの本数の平均はおおよそ2本の違いがみられた。これは、左右の本数の差もあるが、区画が多い方が区画の端に樹木が植えられないため樹木の間隔がひらき本数が少なくなると考えられる。

b)次に、浅草通りの街路樹の植栽形態から分析する。

表1.浅草通りにおける本数と区画数

	街路-左	街路-右
樹木の本数(本)	114	89
区画数	22	23
樹木の本数/1区画	5.18	3.86



同一種類を用いて、同一間隔に同形同大の樹木を植栽している浅草通りは、「規則形単純植栽」に分類されることが分かる。それを模式化したものが図2である。この植栽形態から、各植栽形式による効果はどんな地域にでも合い、商業地域や歩行者の多い場所にも適していると言える。しかし、この「規則形単純植栽」が乱れる箇所がある。鉢植えが広がっていたり、区に登録されていない低木などが植栽されている。それは、「自然式混合植栽」が「規則形単純植栽」の配列を乱していた。

5.考察

前述の4-1)の被験者による評価結果と4-2)の街路調査の関係について述べる。

4-1)に示した3地区の評価結果は、はじめに浅草通りを分けて行った調査であるから、全て浅草通りの特性をとらえるための調査であった。

・【緑が少ない感じ⇔緑が多い感じ】の項目では、非常にとややを合わせると【緑が少ない感じ】と回答したのは、57.9%と高い値になった。この評価結果の要因としては、評価の対象となったパネルの写真が緑の少ない12月という季節のものということもあり、この高い値になったということも考慮しなくてはならない。

しかし、この街路調査結果から街路環境の大きな問題と

して街路樹としての緑が課題となっていることから被験者による評価結果と街路調査の結果において、相互関係があるといえる。また、台東区の緑被率をゾーン分けしたものの(平成12年「台東区緑の実態調査」)からも、上野ゾーン0.7%、東上野1.5%と最も低い値が出ていることがわかる。

・【殺伐とした感じ⇔雰囲気のある感じ】の項目では、かなりとややを合わせると【殺伐とした感じ】が57.9%となった。

・【陽気な感じ⇔陰気な感じ】の項目では、かなり【陰気な感じ】が31.8%となった。

これらの高い割合は東上野3丁目地区であった。ゾーン別にみた壁面緑化の少ない傾向がある地域として東上野ゾーンがあげられている。壁面緑化は日当たりの良い通り沿いにすると効果的であるがほとんど行われていないため、このような評価結果が得られたのではないだろうか。というのは、浅草通りは稲荷町駅周辺から田原町駅周辺(元浅草ゾーン)に、建ち並ぶ仏具店が古く、暗いイメージを与えている。このことは、元浅草における評価結果からもあきらかである。

しかし、同時に【静かな感じ】や【雰囲気のある感じ】にも評価の値が傾いているため、決して仏具店のまちなみは悪いものとは言えないだろう。そこで壁面緑化などで彩りを沿えより一層穏やかなイメージを与えることで改善したら良いのではないだろうか。

<まとめ>

今回の研究では、浅草通りを中心に調査を進めたが、大きな幹線道路であるので、商店が点在する他の幹線道路にも共通の問題点や特徴が言えるのではないだろうか。

従来の道路緑化は道路緑化基準(昭和33年、建設省)で示されたとおり、一定間隔に街路樹(高木)を歩道と車道の間うえていくという方法で、今日まで続けられてきたのが現状である。しかし現在、道路緑化は多種多様な要求、及び必要性が問われている。すなわち道路の歩行快適性確保の手段(緑道化)として、道路の沿道公害軽減の装置(環境施設帯)及び自然環境改善の一手段として地域環境改善、保全の役割もある。また商店街、繁華街ではアメニティの創出の装置としても道路緑化の重要性は認識されている。

従来の緑化形式では、現在の緑化要求に対応しきれなくなっているのが現状である。このことは、本研究での緑化の現状でも明かだろう。今後の道路の緑化はその目的機能に沿って、あらゆる条件の中から、その地区に合った機能を備え、都市全体として多種多様な緑化形式、手段で対応すべきである。

<参考文献・引用文献>

- 川本 昭雄、有山 勇次郎、林 次郎、椎名 豊勝：土木建設技術全書⑨道路緑化の設計・施工、山海堂、1986
- 田中 啓一：都市環境整備論-地球環境との共生を求めて-、有斐閣、2001
- 西尾 光司、松原 斎樹、合従 顕、蔵澄 美仁、村野 博司：都市景観評価に対する複合環境評価的視点からの実験的検討、日本建築学会計画系論文集、第522、107-113、1999